

身延文庫蔵「大乘義章第九抄末」所収「滅尽定義・二種莊嚴義・二種種性義・証
教二行義」翻刻

田 戸 大 智

Republication of *nirodha-samāpatti* 滅尽定義, two types of *bhūṣita* 二種莊嚴義, two types of *gotra* 二種種性義, and two types of training, *sākṣāt-karaṇa* and *para-vijñāpana* 証教二行義, in *Nine Chapters on The Daijyō Gisyō Syō* 大乘義章抄 (a commentary on *The Dacheng Yizhang* 大乘義章) owned by Minobu Bunko

Tado Taichi

In *The Daijyō Gisyō Syō*, comprising 13 chapters and owned by Minobu Bunko, elaborate debates on *The Dacheng Yizhang*, which is said to have been selected by Jingyingsi Huiyuan 淨影寺慧遠 (523–592), were summarized by Kanjin 寬信 (1084–1153), a profound scholar who was familiar with Exoteric Buddhism and Esoteric Buddhism. As described repeatedly, the Sanron School attached importance to *The Dacheng Yizhang* for the fulfillment of religious doctrines, while the study of religious doctrines had advanced since the Heian Period (794–1180). Debates at Buddhist temples such as Tōdaiji 東大寺 and Kajūji 勤修寺 were thought to be codified in *The Daijyō Gisyō Syō*, as proven by the 10 chapters of *The E'nichi-Kokōshō* 惠日古光鈔 in which *The Daijyō Gisyō Syō* is cited. In *The E'nichi-Kokōshō*, debates at the Sanron School were summarized by Shōshū 聖守 (1215–1287?) of Tōdaiji Temple. Because *The Daijyō Gisyō Syō* contains important matters to elucidate the actual state of debates at the Sanron School in the Middle Ages, *The Daijyō Gisyō Syō* should be continuously studied.

This paper has republished four items from *Nine Chapters on The Daijyō Gisyō Syō*, namely, *nirodha-samāpatti* 滅尽定義, two types of *bhūṣita* 二種莊嚴義, two types of *gotra* 二種種性義, and two types of training, *sākṣāt-karaṇa* and *para-vijñāpana* 証教二行義. Because *The Meaning of One Vehicle* 一乘義 has already been republished, five items from *Nine Chapters* have thus now been republished.

Because some debates republished in this paper are common to debates in *The Hosshōji Mihakkō Mondōki* 法勝寺御八講問答記, written by Sōshō 宗性 (1202–1278) of Tōdaiji Temple, *The Hosshōji Mihakkō Mondōki* can compensate for parts that cannot be decoded in this republication. Thus, to specifically examine the contents of debates, comparison with other documents is extremely important.

身延文庫蔵「大乘義章第九抄末」所収「滅尽定義・二種莊嚴義・二種種性義・証教二行義」翻刻

田戸大智

一 解題

身延文庫蔵「大乘義章抄」は、勸修寺法務として名高く、顕密に精通した碩学であった寛信（一〇八四～一一五三）が淨影寺慧遠（五三三～五九二）撰とされる『大乘義章』に関する緻密な論義を類聚した資料であり、十三帖が現存する。『大乘義章』については、大正蔵本（底本―延宝二年版本、二二二義科）と古写本の対比から、幾つかの系統があつたようであり、それを踏まえ「大乘義章抄」の義科配列を精査すれば、寛信は大正蔵本に近い系統のテキストにもとづいて同書を取りまとめたことが推認できる。残念ながら、同書の義科数は五十三にとどまるが、当初は寛信周縁で流传していた『大乘義章』に収載される義科に関する論義がほとんど網羅されていなかったことが想定され、同書の義科数も現在の三倍以上あつた可能性も決して否定できない。^②

同書は、繰り返し述べるように、平安時代以降に教学研鑽が隆盛する中で、三論宗が教学の充足化を図るために『大乘義章』を重視し、東大寺や関連する密教寺院等で真摯に議論した内容を集大成したものである。し

たがって、東大寺新禪院の聖守（一一一五～一二八七？）が勅会やそれに準ずる法会で取り上げられた三論宗の論義をまとめたとされる、東大寺図書館蔵『恵日古光鈔』十帖にも同書は引用され、座右に置かれていたことが認められる。^③ 現在、中世以降の三論学派がどのような議論を展開していたか注目されつつあるが、同書もまたその実態を探尋するうえで有益な内容を含んでいるのであり、継続的な研究が必須であろう。

そこで、本稿では、同書十三帖の中から「大乘義章第九抄末」に収録される「滅尽定義・二種莊嚴義・二種種性義・証教二行義」の四義科の翻刻を行った。同抄については、既に「一乗義」を翻刻済みであり、収録される全五義科の翻刻作業が完了した。この他、「大乘義章第八抄」の全翻刻も既に提示している。^⑤

本稿で翻刻した四義科の中、「滅尽定義」については、他の三義の設問が一問あるいは二問であるのに対して、十九問も設けられ、『大乘義章』「滅尽定義」の全般にわたりほぼ逐語的な発問が行われている。そして、その議論の一部は、格式の高い「法勝寺御八講」でも論題として取り上げられたことが、宗性（一一〇二～一二七八）が筆録した、東大寺図書館蔵『法勝寺御八講

問答記』から窺知することができる。すなわち、保元々年（一一五六）第四日朝座の第二問に次のような問答を見出すことができる。

問。淨影大師付_レ明_二八解脱有漏無漏_一。爾者、大乘心滅定唯_{無カ}有漏義。依_二何文_一証_レ之耶。

答。地持論、滅定出受唯聖修文也。

付_レ之、正受言_三忽可_二無漏不_レ聞_一。況_一具文空無相無願滅定正受_二。文若依_二此義_一者、三解脱亦唯可_二無漏歟_一。

ここでは、『大乘義章』卷十三の「八解脱義」⁶で有漏・無漏により弁別する中で、滅尽解脱を無漏と解釈することをめぐり、その根拠が『菩薩地持經』であることが明示され、三解脱にも敷衍するかが議論されている。恐らくこの論義と同工であるのが、「滅尽定義」の第十六問であると推測され、問の部分が装幀の糊付けにより判読できないが、右の記述より欠落部分を補完することで議論の全体像をより明確にすることができる。

このように、論義の内実を具体的に検証するには、他文献との比較が重要な作業である。教学的知見からの更なる検討については、今後の研究に委ねたい。

二 凡例

一、本稿は、身延文庫蔵「大乘義章抄」十三帖の一である「大乘義章第九抄末」に収録される五義科（滅尽定義・一乘義・二種莊嚴義・二種種性義・証教二行義）の中、「滅尽定義・二種莊嚴義・二種種性義・証教二行義」の箇所を部分翻刻したものである。

二、本翻刻は、原則として新漢字を使用した。

三、底本には一部送りがなが付されているが、句読点のみ私に付した。

四、原文では、問答箇所が引用典拠箇所より一段下げになっているが、翻刻ではすべて行頭を統一した。

五、校訂者の解釈により、全体を問答ごとに分割し、冒頭に【】で問答番号を挿入した。

六、原文の異体字や略字、俗字等は基本的に現行の正字に改めた。

余↓爾 畧↓略など

七、以下の文字は本来別字であるが、慣用に合わせて置き換えた。

尺↓釈 廿↓二十 卅↓三十

八、以下の仏教省文章体は、本来の形に還元した。

亥↓涅槃 并↓菩薩 冗冗↓煩惱

九、脱字や誤記の註記は、原文どおり行間に記した。

十、中略の箇所は、原文と同じく○で示した。

十一、虫食いや判読不能の箇所は、□を用いて示した。

十二、装幀の糊付けにより判読不能の部分は、□で示した。

十三、装幀の糊付けにより判読不能の部分で、引用典籍の原文から補える箇所は（ ）を用いて記した。

所は（ ）を用いて記した。

十四、『大乘義章』や『成実論』等からの引用文は、原文との校異を行い、

註で示した。

十五、書誌的概要は、次のとおりである。

〔書写年代〕文和四年（二三五五）

〔書写者〕寥海

〔外題〕 義章第九抄末

〔内題〕 減尽定義

〔尾題〕 大乘義章第九抄末

〔奥書〕 根本本奥書無之

御室御本 二校了

文和四年九月二十六日書寫了 赤羽漸落

紫毫弥進者也

桑門寥海

二十七

〔墨印〕 身延文庫

粘葉裝、表紙(茶)、楮紙、一帖、全二八丁、縱二七・四糎、横二〇・〇糎、
一頁二一行、一行約二〇字前後

三 目 次

減尽定義

- 【第一問】問。毘曇意、以欲界善滅欲界惡時、不滅彼得有何故乎。
- 【第二問】問。成実心、滅定有為無為中何乎。
- 【第三問】問。成実心、滅定雖滅心不同、草木有何故乎。
- 【第四問】問。大乘意、仏滅定、何積之乎。
- 【第五問】問。毘曇意、入滅定者、用幾調心乎。
- 【第六問】問。毘曇心、仏可得滅定心乎。
- 【第七問】問。毘曇心、仏修滅定。爾者、可用六種調心乎。
- 【第八問】問。成実論意、電光羅漢可得滅定乎。
- 【第九問】問。成実論意、入滅定時、作意滅心歟。

【第十問】問。若得滅定、常入常出云。爾者、以何文証之乎。

【第十一問】問。成実心、入滅定、經幾時節云。

【第十二問】問。毘曇心、迦葉於鷄足山入定者、為滅定、為當何。

【第十三問】問。身子・目連、化火烧身云。爾者、直此本身歟乎。

【第十四問】問。緣覺聖者、為得滅定、為當如何。

【第十五問】問。付滅定、就地分別。依成実心、滅定出心。章文如何積乎。

【第十六問】問。大乘意、

【第十七問】問。成実論意、学人可得第八解脫乎。

【第十八問】問。毘曇心、積滅定引經過非想非非想之文。爾者、過者如何積之乎。

【第十九問】問。成実論意、積過一切非想非非想處。經文云想受滅、不云心滅定義。何積之乎。

一乘義(『日本古写經研究所研究紀要』第五号にて翻刻)
二種莊嚴義

【第一問】問。付以六度分別福智、如何積之乎。

【第二問】問。以地前・地上分別福智二嚴事、引何經文証之乎。

二種種性義

【第一問】

証教二行義

【第一問】問。付可說不可說義、且以虚空鳥跡可名可說法乎。

四本文

滅尽定義

【第一問】

問。毘曇意、以欲界善滅欲界惡時、不滅彼得有何故乎。進云、能滅所滅同地法故_云。付之、設雖同地法、彼善力滅惡者、何不滅其得乎。例如斷善根時、以欲界惡斷欲界善斷彼得、如何。

章云、毘曇所說、非色心法為滅定體。○彼論宣說、絕去心慮得一非色非心之法。○問曰、是中滅去心慮、心得滅不。積言、不滅。何故不滅。能滅所滅同地法故。如欲界善雖滅欲界惡不滅彼得。此亦如是。問曰、若此能滅所滅同地法故不滅得者、斷善根時、以欲界惡斷欲界善。何故斷得。積言、闡提斷善根時、具以方便·無礙·解脫三道斷善。極達善故通斷其得。滅定唯以方便滅心故、不捨得_云。

重尋云、斷善時、何於其惡用無間解脫乎。_{証文可勘之}

【第二問】

問。成實心、滅定有為無為中何乎。進云、無為_云。付之、無為一得不失也。滅定數以出觀或退者、何云無為乎、如何。

【第三問】

問。成實心、滅定雖滅心不同、草木有何故乎。進云、有心得故_云。付之、

成實論意、不立得法。既滅定無為也。何得前心乎。

章云、成實宣說、心識尽處數滅無為為滅定體。問曰、若說心識尽處為滅定體、是滅定中便無心識、應非衆(生)。又若無心、草木何別。成實積言、心得在故猶名有心。以有心故名為衆生。不同草木。何者心得。入滅定者、成就(過去未來世心故名心得。不同毘曇別立非色非心得也_云)。

【第四問】

問。大乘意、仏滅定、何積之乎。進云、滅麁心_云。付之、事妄二識、金剛心時斷尽乎。仏位唯有真識。何云滅麁心乎、如何。

章云、大乘法中、尋名取義、心識尽處為滅定體。以實具論、滅定中亦得有_云心、亦得無心。言無心者、聲聞滅定、無六識心、菩薩滅定、全無六識。分有妄識。諸仏滅定、六·七全無。言有心者、聲聞·菩薩滅定中、猶有本識_之。真妄和合為本識故。仏滅定中猶有真心。若有心識、云何滅尽。滅麁心故_云。

私云、不起集用六識之時、此義云滅麁心歟。
下文云、_{就界分別門}○又大乘中說有真心常而不滅。無色界中入滅定時、雖息心用心體猶存。故不命終_云。

【第五問】

問。毘曇意、入滅定者、用幾調心乎。進云、六種_云。付之、可有八種調心。何除順逆入·順逆超兩句乎。例如遊禪時、加此句有八種。如何。

章云、先就毘曇以弁出入。之時云何。依彼論中、先得八禪極令純熟、次於八禪、六種入定調練其心。故經說言、欲入滅定必先調心。何者六種。一者順入。從初禪入、次第上昇乃至非想。二者逆入。從非想入、次第下轉至初禪出。

(三)逆順入。從初禪入，至第二禪，却入初禪，次第上昇至第三禪，劫入二禪，次第上昇至第四禪。如是却入而復)上昇乃至非想。四者順超。從初禪入，超第二禪，入第三禪，超第四禪入於空處。如是上超乃至非想。問曰、何故唯超一地。聲聞超禪不過一故。五者逆超。從非想定超無所有入於識處、超於空處入第四禪、超第三禪入二禪中、超於初禪起欲界心。六逆順超。從初禪地超入三禪、却入二禪、超入四禪、却入三禪、超入空處。如是却入而復上超乃至非想。然此六種皆就有漏根本定中、轉次相入、不入無漏、不由方便。問曰、上入至非想地即得出定入散心不。釈言、不得。何故不得。若從彼出赴於欲界散亂之心、便超八地。聲聞禪定無如是義。如人極上善心之後不起重惡。彼亦如是。問曰、若言至非想定不得即出起散心者、向前六中第三·第六、至非想定、云何得出。釈言、彼還次第下入至於初禪或至二禪。然後出定起欲界心。若爾、便有八種調心。何得言六。彼逆入者、同第二門。逆次第收故合說六云。

疑云、同第二門之釈、進退有疑。先第三逆順入出觀者、可是順逆入。第六門下、入亦可用順逆超。何遊禪之時、如然。今又可用其義。何釈同第二門乎。次設依逆入、且以第三門說同第二門、以第六門不可收第二門。超定出觀者、必入超出。如何

門下入之事也。逆入·逆超、其旨炳然也。次答云、同第二門、逆次第收者、第三門者如第二門次第逆出。第六門者如第四門逆超出定。又云、同第二門者、拳初等取第四門。言逆次第收者、隨應收彼兩門。次第字深可思之。共收第二門者、何云次第乎。重疑云、可云逆順入者、此順逆出入。逆順超者、依順逆超出。何用化第二·第四門乎。答。以順逆入·順逆超出者、既可八門。豈云六門乎。依無用煩不修之、直從非想不可出欲界。如次用第二·第四門也。

已上愚案頗委細也

八禪定義云、依如毘曇○有漏定中次第及超有其八(種)。無漏亦然。有漏無漏間復有八。是故、通有二十四種。有漏八者、次第有四。超越亦然。次第四者、一是順入)從初禪入、次第上昇、乃至非想。二是逆入。從非想入、次第下轉、至初禪出。三逆順入。從初禪入、至第二禪、却入初禪、次第上昇、至第三禪、却入二禪、次第上昇、至第四禪。如是却入而復上昇、乃至非想、類亦同然。四順逆入。從非想入、至無所有、却入非想、次第下轉、至其識處。如是却入、而復下轉至初禪出。超中四者、一是順超。從初禪地超入三禪、如是漸超乃至非想。問曰、何故唯超一地。聲聞超禪不過一故。二是逆超。先入非想、超入識處。如是下超至初禪出。三逆順超。謂從初禪、超入三禪、却入二禪、超入四禪、却入三禪、超入空處。如是却入、而復上超、乃至非想。四順逆超。作法同前。向下為異。有漏既然。無漏亦爾。問中八者。次第有四。超越亦然云。

云。作法如前。漏無漏相間為異也

私云、二十四種遊禪出、雜心第九·俱舍二十八、其旨全同章文。

【第六問】

問。毘曇心、仏可得滅定心乎。進云、得之云。付之、三十念間、不受余心。

尽智後得之者、仏果不可修加行、如何。

【第七問】

問。毘曇心、仏修滅定。爾者、可用六種調心乎。進云、爾也。付之、仏功德者、皆離染得也。何用調心歟。

(就毘曇以弁出入。入時云何。依彼論中、先得八) 禪極令純熟、次於八禪、六種入定調練其心。○問曰、有人一世之中數入滅定。為當一一別須六種入定調心、為當一調能多入定。彼宗、如來一調已後能多入定。声聞之人、隨別須調云。
私云

【第八問】

問。成実論意、電光羅漢可得滅定乎。進云、得之云。付之、電光羅漢、依欲界定斷煩惱不修上定。依之、傍章云、不得滅定云。何相違乎、如何。
章云、成実法中、趣入滅定有二次第。一、種次第、先得八禪、次修聖道、斷欲界中修道煩惱、上至非想。非想地結或尽不尽。断此惑已○然後滅心。○第二次第、先依電光、修習聖道、断欲界中修道煩惱乃至非想。次修八禪○然後滅心、從初禪入乃至滅定云。
八禪定義云、成実法中○学人但得滅定、不得第八解脫。電光羅漢得第八解脫、不得滅定○云。
私云

【第九問】

問。成実論意、入滅定時、作意滅心歟。進云、不作意滅云。付之、滅尽心意、何不作意乎。依之、經中欲入滅定、必作調心云。如何。

章云、問曰、向說毘曇法中欲入滅定先作六種入定
(問曰、欲入滅尽定時、為作意滅、為不作意。成実而積。一義積云、作) 意
滅是故方滅。若不作意、更緣余法、不名滅心。良以、行者断煩惱來、恒常制心。以制心故、欲滅即滅。故彼成実引經說言、欲入滅定必先調心。第二積云、不作意滅而心自滅。如人眠時不念而現。以常修故云。
成実論十三云、滅尽定 問曰、經說、行者入滅尽定時、不自念入。起時亦不自念。若爾、云何能入。答曰、常修習故定力堅強、雖不自念而能得入。又此行者、從断有為爾來入滅。若不制心念緣有為、則不名入。是故經說、入此定者先調習心。故能得入云。

【第十問】

問。若得滅定、常入常出云。爾者、以何文証之乎。進云、不起滅定而現威儀云。付之、此文無常出義、如何。
章云、次就大乘以弁出入。○義別有四。○前三略 四、拋德成。無時不入。以常寂故。無時不出。以常用故。故經說言、不起滅定而現威儀為宴坐也。問曰、菩薩何因緣故独能常入復能常出。積言、菩薩畢竟不取一切心相故能常入、不取滅相故能常出云。
維摩經上云、夫宴坐者、不於三界現身意。是為宴坐。不起滅定而現諸威儀。是為宴坐云。
義記二云、不起滅定現威儀者○声聞滅定捨四威儀、

（終則依於真識心起。如實）

三昧法門之力自然而現。如如意珠無心分別能雨宝物。○是故、說言不起滅定而現威儀云。

【第十一問】

問。成實心、入滅定、經幾時節云。進云、多劫云。付之、何爾乎。既論無此文、如何。甚難

章云、弁滅定時節分齊。○成實法中、破毘曇家欲界衆生段食養身七日須出。彼說、一切入滅定者、正受持身、縱逕多劫出亦不死。於中或有出而死者。以本命報¹⁵垂盡之時、而入滅定。是故、出時即便命終。不由在定多時故死云。

又云 迦葉事、如下撰之

或云、滅定有識食。以之云經多劫歟。

【第十二問】

問。毘曇心、迦葉於鷄足山入定者、為滅定、為當何。進云、般涅槃云。付之、弥勒成道出定礼觀。何云入涅槃乎。依之、成論及摩訶摩耶經等入滅尽云。如何。

章云、問曰、經說、摩訶迦葉在鷄足山待弥勒出。從山而起、礼觀弥勒、現十八變、然後滅身。彼今在山、為般涅槃、為入滅定。積有兩義。若依成實、彼入滅定正受持身故、後能出礼仏現化。若依毘曇、彼入涅槃、非是滅定。若是滅定、出即身壞。何能詣礼事供養、広現神化。又復依如阿育王經宣說、迦葉欲涅槃時、往（辞世王云、入涅槃。定知、所入非是滅定。又復世尊付法藏中說、仏滅後迦葉持法經二十年。摩訶迦葉般涅槃）後、阿難持法復二十年。

如是次第。故知、彼今入般涅槃。問曰、若彼入涅槃者、後時何能詣礼觀広現神變。積言、彼是留化神力故能如是云。

【第十三問】

問。身子・目連、化火烧身云。爾者、直此本身歟乎。進云、留化身云。付之、此身直入矣。何云留化身乎、如何。

章云、如仏世尊般涅槃時、摩訶摩耶來至仏所、仏為起坐。亦如舍利目捷連等、化火烧身。此等皆是留化力也云。

【第十四問】

問。緣覺聖者、為得滅定、為當如何。兩方。若云不得者、章云、三乘賢聖所得云。若云得者、章上文積滅定初得云藉說起故云。緣覺不聞仏說。何得之乎、如何。

章云、次就人論。総相論之、唯是三乘賢聖所得。別相論之、小乘人中唯有那含羅漢人得。○大乘法中、種性已上一切皆得。若復通論、十信已上亦漸得之云。

重尋云、別論之時、不出仏及緣覺、如何。

私云、可撰羅漢也。於依教力難者、現身全不可有。此義前世間教力也。先年最勝講、覺俊対長与問之。長与答云、百劫前聞教也云。

章上文云、次就界論。界謂三界。○小乘法中、最初修得要在欲地、非上二界。藉說起故。欲界地中有仏宣說滅心之法故得修起。上二界中無仏宣說故不修起。（問曰、上界無仏說法得修諸禪。何為不得修起滅定。積言、凡夫過去已來、曾得諸禪。以是凡夫常所得法故、上）修起。凡夫本來不得滅定。以非

凡夫常得法故、上不修起。若退重修、上界亦得云。

五智義云、緣覺人中、但有法住及泥洹智無余三種。以後三智依教修起。緣覺出世無教可依。是故、無之云。

【第十五問】

行祐 三十講

問。付滅定、就地分別。依成實心、滅定出心。章文如何積乎。進云、雖無文証、此義推之、与毘曇同云。付之、見成實論文、次第入滅定積了。問出心、其答云、亦次第起漸入入鹿心云。無同毘曇起無所有處之文。何云与毘曇同乎。

章云、次就地論。○次論入心。声聞滅定非想心入。余心鹿強難可滅故。○次論出心。毘曇法中、或非想出、或無所有出。次第正受非想心出、超越正受無所有出。声聞超禪不過一故、余地不出。○成實法中、雖無文証、以義推之、与毘曇同。毘曇所立彼不非故云。

成實論十三云、滅尽定品 問曰、有人言、滅尽定是心不相応行、亦名世間法。此事云何。答曰、如上說、起此定者有深寂滅等諸功德。是功德世間所不有¹⁸。

○問曰、此定如是次第入者、亦依次第起耶。答曰、亦次第漸入鹿心云。
私云、此論義僻事也。論文問言次第入者、答云亦次第起云。此是次第正受之人也。不說超越正受。故

【第十六問】

問。大乘意、

進云、引地持論云滅尽定為聖住之文也云。付之、聖位、何必唯無漏乎。例

如三解脱門。雖為聖住、通漏無漏、如何。

章云、就有漏無漏分別。○毘曇法中、一向有漏。体是非想有漏法故。成實法中、一向無漏。体是數滅無為法故。大乘法中、總相論之。体是無漏故。地持中說為聖住。於中分別亦有有漏無漏之義。若說六識·七識心滅為滅定、一向無漏。若說第八真識体寂為滅定、体亦是無漏。若說第七妄識心寂為滅定、相似無漏、性是有漏云。

八解脱義云、大乘法中、前之七種始学有漏。終成無漏。第八一種一向無漏。故地持中說滅尽定以為聖住云。

地持論三云、如來無上無等三種住多於中住。聖住·天住·梵住。是名住無上空無相無作。滅尽正受是名聖住。四禪·四無色定是名天住。四無量是名梵住。

○聖住中住空三昧及滅尽定。天住中住第四禪。梵住中住大悲云。

義記言、彼三三昧滅尽正受名為聖住。唯聖依故云。無別狀

三解脱門義云、第七門中就地分別。小乘法中、□□不(定)。有人宣說、三脱三昧、唯在四禪未來中間及三無色。以無漏故。復有說者言、三解脱一向無漏。備如向弁。三三昧者、通漏無漏。無漏三昧、如三解脱。有漏之者、在十一地。所謂欲界根本四禪未來中間及四空處。大乘法中、三脱三昧、通漏無漏。

有漏之者、備如向說、在十一地。無漏之者、依於十地。所謂八禪未來中間。若復通論、亦依欲界。大乘宣說、欲界地中有禪定故云。

私云、此論義惡乎、得意歟。約地持說者、三解脱門云聖住之時可唯無漏。但三解脱門義积心、依地分別言依十一地者、欲界相似三解脱可通有漏云也。此義小乘心、亦同毘曇。又存此義非別論義歟。

【第十七問】

問。大乘意、

問。成実論意、学人可得第八解脱乎。

章云、成実法中、滅定与彼第八解脱一向別体。第八解脱偏在果中。滅尽定者通因及果。故成実言、滅尽定者学人亦得、第八解脱唯無学得。又彼論言、滅尽定者滅心心法、第八解脱滅諸煩惱。彼論復言、滅尽定者滅想受等、第八解脱滅無明愛。故知、全別云。

疑云

【第十八問】

問。毘曇心、積滅定引經過非想非非想之文。爾者、過者如何積之乎。進云、過者名到云。付之、見雜心論云度正受云。滅定於九次第定勝過。何有過言也。全非別義、如何。

(章云、次積其文。如經中說、過一切非想非非想處、想受滅身作証名滅尽定。言過非想非非想者、論積不同。毘曇積云、過者名到。到非想地即能滅心故名為過。非謂要斷非想煩惱超出名過。成実積云、超出名過。故彼論言、学人能見非想地中一切行空斷非想結。名之為過。但斷未盡。不能不生故名学人。非是始到說之為過云。

雜心論七云、問。滅尽定不応第一有撰。何以故。如所說度一切非想非非想處想受滅成就住。答。第一有撰。世尊以彼度諸正受及愛欲故說也。学者度正受住故說。無学者度愛欲故說。復次度一切非想非非想處者、此說見道斷。想受滅者、此說修道斷云。疏無別積。如論□私云

【第十九問】

問。成実論意、積過一切非想非非想處。經文云想受滅、不云心滅定義。何積之乎。進云、為彰滅空有二心□之義云想受滅也云。付之、若顯此義者、弥可云心滅也。心滅之言可兼二滅故也。既彼論意、有為緣心名想受、無為緣心名惠受云。若云想受滅者、又不兼二種滅義、如何。

章云、想受滅者○成実所立、滅尽定中滅一切心、一切心法通名為受。受有二種。一者想受、二者惠受。有為緣心名為想受。無為緣心名為惠受。言滅想者、明有為緣想受滅也。隱受存想故云滅想。言滅受者、明無為緣惠(受滅也。隱慧彰受故說滅受。問曰、心滅通撰空有。何不就通說心滅乎。為彰空有二心滅故云。

成実論十三云、滅尽定品 問曰、若滅尽定能滅一切心心數法、何故但說想受滅乎。答曰、一切心皆名為受。是受二種。一想受、二慧受。想受名為有為緣心。

以想行假名法中故。假名二種。一因緣和合假名、二法假名。是故一切有為緣心皆名為想。惠受名無為緣心。是故、若說想受滅者、則為說一切滅云。

一乘義(『日本古写經研究所研究紀要』第五号にて翻刻)

二種莊嚴義

【第一問】

問。付以六度分別福智、如何積之乎。

章云

引優婆塞經・相續解脱經・地持論・小品・涅槃等說、皆如六度義抄。仍略之。

【第二問】

問。以地前・地上分別福智二嚴事、引何經文証之乎。進云、法鼓經云。付之

証教兩行義

章云、就位論、位別有二。一、世間・出世間相對分別。地前世間。地上出世。

然福与智義有通別。通而論之、並通世間及与出世。所言別者、如法鼓經說。

地前之行名為福德。地上所行說為智慧云。

大法鼓經二卷 宋文帝元嘉十二年天竺三藏 求那跋陀羅譯

私云、件經非大師所覽。此外錄無法鼓經□□

二種種性義

【第一問】

定也云。付之、習種者十住、性種者十行也。偏可云習種前、何不定乎。

章云、第一門中、約就行位弁定先後。二種性者、一習種性、二性種性。此二

種性、若揆位分、習種在前、性種在後。若就行論性習同時。以同時故前後不

定。依体起用、先明性種、後明習種。尋用取体、先明習種、後明性種。与彼

証道教道相似。就位以論、教道在前、証道在後。世間之行為教道故、所以在

前。地上之行為証道故、所以在後。施行論之、証教同時。以同時故先後不定。

依体起用⑳、先証後教。尋用取体、先教後証云。

【第一問】

問。付可說不可說義、且以虛空鳥跡可名可說法乎。進云、不可說云。付之、阿那律、天眼見虛空鳥跡、如何。

章云、然証望教、一向巨說。於中別論亦有可說不可說義。義相云何。分別有

五。第一可以總相玄標名為可說。故地經中宣說五偈顯示義大。又復經中說之為証。不可即相指序示人名不可說。故地經云、言說不及。此義如彼空中所有

鳥跡風画等處。可以玄談名為可說。不可即相指以示人名不可說○云。余四義略之

大乘義章第九抄末

根本本奥書無之

御室御本 二校了

文和四年九月二十六日書写了 赤羽漸落

紫毫弥進者也 桑門寥海 二十七

註

(1) 岡本一平『大乘義章』のテキストの諸系統について(国際シンポジウム報告書『東アジア仏教写本研究』国際仏教学大学院大学日本古写経研究所・文科省戦略プロジェクト実行委員会、二〇一五) 参照。

(2) 同書の概要については、拙著『中世東密教学形成論』第五部（法藏館、二〇一八）参照。

(3) 『惠日古光鈔』については、永村眞「論義と聖教―「惠日古光鈔」を素材として」（『中世寺院史料論』吉川弘文館、二〇〇〇）が先駆的業績である。その他、同「平安時代における東大寺の教学と法会」（『東大寺の思想と文化』法藏館、二〇一八）にも言及がある。また、拙稿「吉蔵撰『大般涅槃經疏』関連の論義について―東大寺図書館蔵『惠日古光鈔』を中心に―」（『印仏研』七一―二、二〇二二）では、僅かながら内容を分析した。

(4) 小野嶋祥雄「南北朝期の三論教学 附・東大寺図書館蔵『秀義抄』翻刻（六論題）」（『南都仏教』一〇二、二〇二二）では、十四世紀頃に活動した秀海の「草案」を編集した『秀義抄』に着目し、翻刻と考察を行っている。

(5) 同書の翻刻研究については、拙稿「日本における『大乘義章』の受容と展開―附 身延文庫蔵『大乘義章第八抄』所収「二種生死義」翻刻」（金剛大学仏教文化研究所編『地論宗の研究』国書刊行会、二〇一七）、同「身延文庫蔵『大乘義章第九抄末』所収「一乘義」翻刻」（『日本古写経研究所研究紀要』第五号、二〇二〇）、同「身延文庫蔵『大乘義章第八抄』所収「四有義・四識住義・四食義・五陰義」翻刻」（同上第六号、二〇二二）、同「身延文庫蔵『大乘義章第八抄』所収「六道義・八難義・十二入義・十八界義」翻刻」（同上第七号、二〇二二）等、参照。

(6) 大正四四・七三二頁上。『菩薩地持經』卷三、大正三〇・九〇一頁下。

(7) 『大乘義章』の原文では、「亦」となっている。大正四四・六四五頁中。

(8) 『大乘義章』の原文では、「人」となっている。大正四四・六四五頁下。

(9) 『大乘義章』の原文では、「後」となっている。大正四四・七二一頁中。

(10) 『大乘義章』の原文では、「意滅是故」が「意滅心是心」となっている。大正四四・六四六頁中。

(11) 『大乘義章』の原文では、「滅意」となっている。同前。

(12) 『成実論』の原文では、「経説」が「経中説」となっている。大正三二・三四

六頁中。

(13) 『成実論』の原文には、「時」がない。同前。

(14) 『成実論』の原文では、「令」となっている。同前。

(15) 『大乘義章』の原文では、「根」となっている。大正四四・六四六頁下。

(16) 『大乘義章』の原文では、「中」がない。大正四四・六四七頁下。

(17) 『大乘義章』の原文では、「世」となっている。大正四四・六四七頁中。

(18) 『成実論』の原文では、「不有」が「不応有」となっている。大正三二・三四六頁上。

(19) 『成実論』の原文では、「第起」となっている。同前。

(20) 『菩薩地持經』の原文では、「量心」となっている。大正三〇・九〇一頁下。

(21) 『大乘義章』の原文では、「一切心法」が「滅一切法」となっている。大正四四・六四八頁中。

(22) 『大乘義章』の原文では、「慧」となっている。同前。

(23) 『大乘義章』の原文では、「名為」がない。同前。

(24) 『大乘義章』の原文では、「慧」となっている。同前。

(25) 『大乘義章』の原文では、「在」となっている。同前。

(26) 『成実論』の原文では、「縁」がない。大正三二・三四五頁上。

(27) 『成実論』の原文では、「慧」となっている。同前。

(28) 『大乘義章』の原文では、「取」となっている。大正四四・六五一頁上。

(29) 『大乘義章』の原文では、「以」となっている。大正四四・六五三頁下。

※本翻刻及び影印の掲載に当たっては、身延山久遠寺、身延文庫、大本山東大寺、東大寺図書館に格別なるご配慮を賜った。ここに衷心より感謝申し上げます。

※本研究は、JSPS 科研費 JP19K00068 の助成を受けたものである。